

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年)：法文学部・1年

氏名：三浦 乃亜

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	タイ
研修期間	平成30年2月13日～平成30年2月24日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回のタイ研修は私の人生において大いに重要な意味を持つものになった。この研修では、味の素やラン農園、NFI、GreenDeli Foodなど多くの企業を訪問した。農学部主催ということもあり、内容が専門的で難しい説明もあったが、ロイヤルプロジェクトについてや衛生管理の仕方、興味深いものばかりであった。私が特に興味を持ったのは、ジットラダーパレスの訪問だ。国王を中心に取り組んでいるロイヤルプロジェクトの工場を実際に見学しタイが抱えている貧困という問題を牛乳を加工して練乳やミルク飴を作るなどして商業にかえていく過程を見ることができた。こういった取り組みもあってタイは想像以上に発展していたが、同時に衛生面や交通面で課題が多く残っていると思った。いつ交通事故が起こってもおかしくはない状況であるので信号機の設置から行うべきであると感じた。私がこの研修で得たものは2つある。1つは、「疑問を持つ」ことである。大学の授業、企業訪問、どこに行っても岡本先生がおっしゃっていたのは、「何か質問をしなさい」である。私は最初英語がわからないから質問ができない、ではなく、質問自体が全く思い浮かばなかった。いかに自分が何も考えないで毎日を過ごしていたか実感した。疑問を持つことの大切さを知った。日が経つにつれ、積極的に質問をすることができるようになってきが、英語がわからず自分の言いたいことがうまく言えずとても悔しかった。2つは、「何か全力でしてみる」である。KMUTTに筑波大学から留学していた井上さんとの出会いにより気付かされたことだ。会話の中で井上さんから、「大学で何か全力でしてることある」と聞かれた。その時私は、何も答えられず、自分が大学に入って1年間何をしていたのか深く考えさせられた。また、この研修では、約11日間の中で日本とタイの違い、古くから積み重ねきたタイの風土を色濃く感じることもできた。大学内にある国王の肖像にお辞儀をしたり、屋台のような屋外にあるお店で焼肉が焼かれていたりとは日本では決して見られない光景は新鮮で日々刺激を受けた。環境が変わることにより、自分に足りなかったことが見え、見ないようにしてきたものにも目を向けることができた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>この研修では、大学での講義、企業見学、毎日の小さな出来事、一つ一つから今後どう自分が大学で学んでいくか考えさせられた。タイ研修で得た、「疑問を持つ」、「何か全力でしてみる」この2つのことを忘れずに日々実践していきたい。「何か全力でしてみる」ことに私は、留学にすることを決めた。農学系の講義が多く、自分の学んでいる分野と関係がなかったが、違う分野にも興味が湧いた。色々なことを勉強したいと思った。また、この研修は沢山の人の支えられて成り立っていることがわかった。周りの人に感謝することを忘れないようにしたい。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年)：農学部・1年

氏名：野間 夏乃

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	タイ王国・バンコク市 モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2018年2月13日(火)～2018年2月24日(土)
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>この研修で私は多くのことを経験した。国際線に乗ることや英語での日常会話も初めてだった。日本では経験できないことがたくさんあった。手荷物検査の際には、靴やコートを脱いだりした。また、未開封のペットボトルを持ち込むことはできなかった。スワンナプーム空港ではお香の香りがし、カルチャーショックを受けた。ハブ空港ということもあり多様な国の人々を見かけた。普段は日本人に囲まれて暮らしていたためとても新鮮だった。自分がいかに小さな世界の中で生きているか痛感した。始めのころは英語を聞き取ることに必死で会話があまりできなかった。自分が今まで学習してきたものとは違うタイ語訛りの英語だった。我々日本人の英語もネイティブスピーカーにはこのように聞こえているのかと感じた。これからはタイ人のようにもっと自信をもって話そうと決めた。研修の中盤あたりから自分も会話に参加できるようになった。それまでは相手の質問に答えるだけだったが、自分から質問をしたり、自分のことを語ったりした。当初は英単語が出てくるか常に不安に思っていたがそれも次第に薄れ、とにかく何か言うことができるようになった。それからは会話が楽しくなった。日本に帰ってからも英語会話を勉強したいと思った。「AJINOMOTO」では初めて英語で質問をすることができた。それに続きラン農園でも質問した。土植えと吊るし植えの違いを聞いたところ、それぞれ別種のランであり、土植えのランはシュートが何本も出るタイプで、水を多く必要とするので土に植える必要がある。一方、吊るし植えのものはシュートは1本だけ伸び、水が少なくてもよいので土植えする必要はないと伺った。実物を見ながらの説明で納得できた。タイの道路は日本とは全く違っていた。バイクが多い印象を受けた。2列ぐらいになっており、車も十分にあった。混んではいたがクラクションが鳴ることは減多になかったため不思議な印象を受けた。タイには観光地名物の乗り物トゥクトゥクだけではなくカプーンというものもある。7から8人乗りの小型バスのようなものだ。非常に揺さぶられるのは日本には珍しくとても楽しかった。カプーンに乗り、大きなスーパーマーケットに行くとお土産にぴったりのお菓子や袋麺などが多くあった。また、観光地のトイレや飲食店の水はお金がかかることを身をもって知った。ただでサービスしているのは日本ぐらいなのではと考えた。この研修で当たり前と思うことがそうではないことが分かった。様々な考えに感化されたように思う。とても良い経験になった。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>自分の基準通りに全てが行われていると考えてはならない。人によって、国によって基準も考え方も違う。英語に関しても、いろいろな英語がある。タイ人の英語はタイ語のような英語だった。大韓航空のCAさんは韓国語のような発音の英語をしゃべっていた。その人のバックボーンと合わせて発音を聞き取るように努め、コミュニケーションを取れるように心がけたい。また、自分も大きな声ではっきり、ゆっくりとしゃべることで、聞き手にとって分かりやすい英語を話せるよう頑張りたい。</p>	

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所 属 (学部 (研究科) ・学年) : 農学部 ・ 1年

氏 名 : 上野 綾華

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先 (国・地域) 滞在地	タイ・バンコク
研修期間	2018年2月13日～2018年2月24日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>私にとって今回の海外研修が初めての海外であり見るもの全てが新鮮で、とても充実した12日間だった。この研修の中で特に印象的だったことを三つ挙げる。</p> <p>一つ目は、タイの食について学べたことだ。この研修の中で、味の素の工場、National Food Institute, Greendeli food, Royal Project Jitlada palaceへの訪問は最も貴重な経験だったと感じている。タイは「世界の台所」目指し、自国で生産加工された食品を海外に輸出するための研究や国際基準に基づいた検査が行われていることが分かった。現在でもタイは多くの冷凍野菜や果物を日本に向けて輸出をしているが、研究が進むことでタイの多種多様な食品がさらに美味しく日本で食べられる日も近いのではないかと感じた。また、タイの大学院生と交流し、food wasteについて考えた。私は考えつかなかった角度からの問題解決の意見を聞くことができた。</p> <p>二つ目は、ロイヤルプロジェクトについて詳しい話を聞いたことだ。ロイヤルプロジェクトとはタイ北部の山岳地帯に住み、麻薬の製造に使われるケシを栽培することで生計を立てていた農民を救うために前国王のラーマ9世が1969年から始めたプロジェクトである。持続可能な生産を可能にするために、国王であったラーマ9世自身が育てやすい作物を調べ、硫酸が含まれ農作地に向かない土地に石灰やリン酸を加えることで新たに農作物を作れるようにするなど農民の生活の質の向上を図った。国王が先頭に立って問題を研究し、解決していくというタイ・ロイヤルプロジェクトのシステムを他の発展途上国に広めることができれば、そこもさらに発展するのではと感じた。</p> <p>三つ目は、文化に興味を持つようになったことだ。研修中に遺跡や寺院、博物館を訪れた。そこでタイの歴史に触れ、古くから多くの国と関わりを持ち様々な文化が入り混じって確立されたタイの文化に興味を持った。それと同時に、私の母国の歴史や文化について学び、日本と全く異なる文化を持つ海外の文化を実際に見てみたいという思いが強くなった。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>研修を終えて、今後私が意識していきたいことは主に二つある。一つ目は、人とコミュニケーションをとることができる語学力を身に付けることだ。今回の研修は主に英語が使われ、自分が伝えたいことは多くあるにも関わらず細かなニュアンスまで英語にすることができないことや、相手の意図を正しく理解できないことが多々あり、何度ももどかしい思いをした。今まで、英語を勉強してきたが、文章を読んだり聞いたりする能力とコミュニケーションをとる能力は全く異なるものであると実感した。そこで、今後は海外の方と関わりを積極的に持ち、英語でコミュニケーションをとる能力を養っていきたい。二つ目は、初めてのことに挑戦することだ。初めてのことに挑戦するには少しの勇気が必要になるが、少しの勇気を持ち様々な経験を積むことで視野の広い人間になりたいと考える。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年) : 工学部・1年

氏名 : 田中 拓人

授業科目名	2017年度 国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	タイ・バンコク
研修期間	2018年2月13日(火)～2018年2月24日(土)
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>研修を通じて最も向上したと思うものは語学力だ。特に、英語を話す力である。現地タイでは、我々とタイ人をつなぐ唯一の言語は英語以外にないため、口から自然と英語ができるようになった。また、タイ人にとっても母国語が英語ではないため、お互いわからない言葉はジェスチャーを用いて楽しく会話をすることが出来た。とは言え、タイの学生の英語レベルは全般的に高く、私たち日本人とは英語を話す能力が格段に違っていた。私は、元々英語が好きであるため、このように実践的に英語を使って会話を楽しむ環境がとても刺激的であったし、何より自信につながった。そんな中でいくつかの課題が見つかった。例えば、PBL(問題解決型学習)での場面だ。私は、自分の話したいことは英語でしっかりと伝えることはできたと思うが、現地の学生の話す内容を把握し、それに対して的確に反応することが出来なかった。私はこの時、自分が英語を聞き取る能力に欠けていると感じた。私が聞いてきた英語は、発音やスピードも一定の、教材で使うような英語だったが、実戦では語調や発音も様々で、内容を把握することが後回しになってしまった。英語を話すだけという目的にとらわれず、相手の考えを落ち着いて聞くという姿勢は、これからさらに伸ばしていくべきことだと考えている。</p> <p>私は、KMUTTの先生方と話す機会を持つことがあったので、バンコクの大都会から見える光景について質問した。高くそびえ立つ近代的なビル群からふと目を落とすと、そこには昔ながらの古い町並みが広がっている。なぜこのような格差が広がったのか。それは1960年代のバンコクの工業化にさかのぼる。都市に出れば安心だという期待のもと、過剰な労働人口が農村から流入した。工業化が余剰労働力を抱えきれず失業者を多く生み出しているという。私の素朴な質問にも先生方はわかりやすい言葉で丁寧に教えてくれた。そこで私が得た成果というのは、どんな些細なことでも疑問を見つけ、それを必ず誰かに聞くという姿勢だ。疑問の残ったまま日本に帰るのは不甲斐なかったため、忘れないようにメモなど取り、必ずわかる人に聞くという習慣が出来上がっていくことに何より達成感があった。この12日間の研修で、英語を用いて積極的に人と会話をしようとする自分が育った。自分の英語力を確かめる貴重な機会となったので、これからは英語を母国語としている国への研修も考えたい。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>タイで過ごしていると、日本との生活のスタイルの違いがはっきりと感じられた。なので私はこれから、世界にはどんな生活スタイルを送っている人々がいるのか、自分で確かめたい。1～2週間ほど現地で暮らし、現地の生活に溶け込み、どんな風土の違いが感じられるか肌で体感したい。また、そのために必要な語学力は事前に日本で培いつつ、現地で実際に応用させたい。海外で英語を使うとはどういうことなのか、この研修でイメージをつかむことが出来たので、これからも海外経験を積むことでさらなる英語力のスキルアップに努めたい。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年) : 法文学部・1年

氏名 : 萩原 幸大

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	タイ王国・バンコク市、モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	平成30年2月13日 ~ 平成30年2月24日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>本研修では、タイに赴き、各地の企業や施設、大学での現地学習をすることによって多くの貴重な経験を得ることが出来た。海外への渡航経験がなかった自分にとっては全てが真新しく重要な経験に感じたが、特に「研修の成果」といえる部分に注目して述べようと思う。まず「AJINOMOTO」や「Green DeliFood」を始めとする現地企業の訪問では、ただ製造方法などに関心を持つだけでなく、企業の成立要件や、社会でどのような働きが求められてそういった需要をどのように活動として実体化させていくのか、そのプロセスについての考えを深めることができた。これから「企業」や「商売」を考えるうえで非常に重要な経験になったと思う。さらに、現地で行われたタイの農業の形態や食糧問題についての講義では、日本と全く異なるタイの生産方式、商業形式、さらにはそれに伴う食糧問題に対して強く関心を持ったし、自国以外の「食」に対する現状を知ることが出来たことはこれから国際問題を考えていく上で重要な経験となった。これらの経験・知識を踏まえて現地大学にてタイ人大学院生と討論を行った。テーマは「フードロス」、すなわち生産・流通・消費の過程において利用されずに廃棄されてしまう食料をどうすれば減らすことができるのかについてである。この活動では英語で話す能力を養うことが出来た上に、互いの国の状況を鑑みながら討論を進めていくという今まで経験したことのない学習を経験できた。国が違えば状況も課題も異なり、国際規模の問題を考えていく上ではそれらの全てを考慮しなければならない、そこに問題解決の難しさがあると強く感じた。この研修で私が得た知識や経験は、日本にいては決して得ることのできなかつたであろう貴重なものであり、それと同時に国際的な感覚、国際問題に対する意識を大きく高めることが出来た。そして同じくこの研修に参加した人達と協力し合ったことはいい思い出でもあるし、問題解決を図る上でも重要な試みであったとも考えている。文章で伝えることが困難なほどの莫大な経験、知識を得ることが出来たという意味で、本研修は私の人生に大きな影響を与え、大きな糧となった。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>本研修では多くのものを得ることが出来たが、それと同時に今後の課題も多く見つかった。まず国際問題の解決を志すうえで、先進国や中進国だけではなく、より多くの国の現状、背景を知る必要があると感じた。また、今回得た経験・知識をそのまま放置してしまうことなく、事後学習をしっかりと行うことによって、学んだことを脳裏に刻み込みたい。また、自分の英語力の拙さを感じる機会があったので、読み書き能力だけではなく、今後は人との会話を念頭において、さらに英語学習に励みたい。</p>	

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所 属 (学部 (研究科) ・学年) : 農学部 2年

氏 名 : 黒田 祐美

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成 (共通)
研修先 (国・地域) 滞在地	タイ王国・バンコク市、 モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2018年 2月 13日 (火) ~ 2018年 2月 24日 (土)
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>この研修を通して私の考え方や視野が大きく変わりました。私の中で勉強になったことが大きく分けて三つあります。</p> <p>1つ目は、食についてです。私たちが訪れたGreen Deli (冷凍食品工場) では、高温多湿下のタイでの品質保持の方法の1つである冷凍保存を活用しており、生ものに比べ賞味期限も格段に伸び、食品の無駄を減少させることにも役立つと思いました。しかし、国ごとに輸出できない商品もあり、さまざまな課題も感じられました。また、大学でのタイの米についての講義では、サンプルが1人1人に配られ、表面を触ったり、香りを嗅ぐことができ、日本とは異なる部分を実際に触れることができました。</p> <p>2つ目は、PBLについてです。異国語で相手の意見を聞いたうえで自分の意見を述べ、最終的にまとめるという作業は難しかったです。しかし、黙ってはいままとまらないので、勇気をもって自分の考えを伝えました。分かる単語だけで伝えようとしたのですが、伝わらないことが多く、少しへこむこともありました。今もっている英語力には限界があるので、どうすれば伝わるのか試行錯誤しました。そのとき、自分に足りない面も見え、意欲的に活動することで得るものもありました。初めてPBLを行ったが、お互いさまざまな意見をもっており、伝え合い、理解することの重要性も学びました。とても良い機会でした。</p> <p>3つ目は、ロイヤルプロジェクトについてです。歴史的な政策であり、王様も一緒になって、より良い商品の生産、生活の質の向上など4000個にのぼるプロジェクトが行われています。研修で訪れた宮殿や研究所、NFIでもロイヤルプロジェクトが活用されていました。私は、いま現在だけの生活の向上だけではなく、次世代まで土地、穀物を受け継ぐことが可能なうえ、国民のやる気にもつながり、とてもよい政策だと思いました。日本でも、このような制度があってもいいのではと思いました。尊敬できる政策ばかりでした。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>日本とは異なることばかりで初めは戸惑いましたが、すぐに慣れることができ、他の文化や生活を受け入れ、順応できたのではと思います。また、自分の意見を伝えることができず、自分に足りないものも見えてきました。これからの大学生活でも、必要なスキルが足りていないので、自分なりに成長しなければいけないことが分かりました。保守的になっていては、何も変わらないと思うので、意欲的に活動していこうと思っています。この研修に参加でき、とても良かったです。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年) : 農学部(農業生産科学科)・2年

氏名 : 茨木 彩加

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成(共通)
研修先(国・地域) 滞在地	タイ王国・バンコク市、モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2018年2月13日(火) ~ 2018年2月24日(土)
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>バンコクで行われた12日間の研修の中で、私は2つのことを学ぶことができた。</p> <p>1つ目は、語学力の大切さだ。研修中の中でタイの学生や先生、訪問した企業の方との会話は基本的に英語で行われた。しかし、私は英語が得意ではなく読み書きや言葉の意味を理解するのに人一倍時間がかかる。そのため、研修中もスライドの図や写真、施設の様子や展示、先生や周りの学生に助けをもらうことで何とか大まかな内容を把握することができるという状態だった。日常会話に関してもタイの学生の方が積極的に話しかけてくれたのに受け答えがほとんどできなかった。英語が得意でないことは自覚していたのでそのことについて落ち込むということはなかったが、もっと勉強していたらと思うことは少なくなかった。また、タイの学生の方たちの英語を使いこなし、日本語を知ろうとしてくれていた姿勢も英語を勉強しようと思うきっかけになった。タイでの研修は、これまで得意ではないと自覚していながら英語の勉強から逃げていたことを反省するいい機会になった。</p> <p>2つ目は、女性でも努力すれば社会で活躍していくことができるということだ。タイでは女性の社会進出が大きく進んでおり、実際にKMUTTや企業訪問の中で、生き生きと働く女性の姿を多く見ることができた。タイの女性の社会進出については事前授業の中で習っていたが、タイの働く女性を見て、私も積極的に多くのことを勉強し社会で活躍できる女性になりたいと思った。また、日本と海外の女性の社会進出の状況の違いについて知る良い機会になった。日本でも女性の社会進出は促されているが、現状では女性が活躍する社会のイメージが世間に普及していないように思った。友人たちとの会話の中で大学院への進学についての話をすると、女性では大学院に進学すると就職先に苦労するのではという意見が出ることは少なくない。また、留学に関しても同様の意見が出ていた。女性の中にも大学院への進学と留学の両方を経験した上で社会に出て活躍する女性が少なからずいることは理解しているが、それは一部の人に限られており、自分がその中に当てはまる人になれるというイメージが持てないようだった。文化的な違いもあることを考慮すると偏った意見ではあるかもしれないが、女性が活躍する社会のイメージを想像することができない学生がまだいることから、日本の女性の社会進出はあまり大きく進んでいるとは言えないのではないかと感じた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回、この研修に参加し短いながらもタイでの生活を送ることで、タイの文化や歴史、現状を多少なりとも知ることができたことは、日本と海外の違いについて改めて考える良いきっかけになった。また、積極的に様々なことを学ぼうと努力するタイの人達と関わることで、これまで自分が逃げていたものと向き合うことができた。この研修を機に英語や海外の企業、自分が所属する学科で学ぶこと以外の内容についても勉強していきたいと思う。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年) : 農学部 2年

氏名 : 樽見 莞奈

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先(国・地域) 滞在地	タイ王国・バンコク市、 モンクット王工科大学トンブリ校
研修期間	2018年2月13日(火)～2018年2月24日(土)
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の研修では、主としてPBL(Problem Based Learning)を通じたタイの学生との交流や企業訪問を行った。まず、学生交流について振り返る。学生はもちろんタイ人だけではない。そこで使われるのが英語である。実際に訪れてみて、彼らと接してみて感じたことは日本人の学生の発言の少なさや、その根本として英語力の低さである。日本人以外の学生は難なく英語を話し、発言することに苦を感じていないようだった。しかし我々日本人の学生も英語でない限り、彼らとコミュニケーションを図る手段がない。日本にいる時には、ほとんど英語を発言する機会はないため、慣れない英語での会話はポツリポツリと単語を繋げることで精一杯であったが、タイの学生たちはそれでもなんとか我々の言いたいことをくみ取ってくれた。そのことに、悔しさや惨めさ、もどかしさを感じた。この気持ちは、実際に海外に行き、交流してみなければ感じ得られなかったであろう。徐々に慣れ、積極的に道中や施設見学中に彼らと英語で話すことで自分の成長やその楽しさをまじまじと感ずることもできた。ほとんど年が違わない彼らであるが、世界でのコミュニケーション力の差は明白であり、学ぶところが多くあった。次に、企業訪問について振り返る。我々は今回、national food institute(nfi)、AJINOMOTO、greendelifoodsの三つの企業を訪れた。national food instituteで最も印象に残っているのは研究所見学である。ここは企業などから送られてきたサンプルのデータを調べることを行っていた。microbiologyの研究室では部屋自体がクリーンベンチとなっており、清潔が保たれていた。また、volumetric calibrationの研究室は重さ、温度、音が正しいかを測る研究室である。ここは、温度が20℃湿度50%が正確に保たれており、器具を置いているテーブルは全てストーンテーブルが用いられていた。ガラスなども収縮膨張するため、湿度が非常に大切なようであった。鹿児島大学での実験室の規模と大きく異なり、全てが目新しく感じ興奮を覚えた。次に訪れたAJINOMOTOでは、うま味成分であるグルタミン酸から作られているMSGの製造を行う工場であった。うま味が少ない食材にMSGを足すとうま味を補えるという点で非常に優れている商品であった。工場見学ではパッキング工程を見せていただき、自分の目でその工程を見ることができ、AJINOMOTOに対する信頼度が上がった。最後に、greendelifoodsは野菜や果物を冷凍する工場であった。我々は実際にその冷凍を行っている工場に入れていただいた。洗い場で洗った野菜を切るのは人の手であった。機械に野菜を挟み上から押して切っていた。大きさが均一かどうか手で分けて機械を通して凍らせていた。ポテトの場合、-75℃で25分間急速に冷凍していた。実際に工場の中に入り、見学する機会はその専門の仕事に就かない限りなかなかできる経験ではないため、非常に刺激になった。今まで述べてきたこれらは、自分自身で感じ、見て、経験したことで得られたものである。この研修に参加できた良かったと心から思う。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>上に述べたように、今の自分に圧倒的に足りないのは英語力、コミュニケーション力である。今後、海外研修や留学した際、今回同様に悔しい思いをしないためにも英語の勉強、特に会話に特化して勤しみたいと強く思った。また、企業訪問で知りえた知識は日常生活だけでは得られなかったものであり、研修に参加していない者との大きな差ともなる。この知識、経験を活かしこれから始まる研究室配属後の勉強に役立てていきたいと思う。</p>	